

自己有用感を高めるキャリア教育の推進

所属校：江戸川区立臨海小学校
氏名：鈴木 富雄
派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：キャリア教育・自己有用感・アントレプレナーシップ教育・自立

I 研究の目的

1 キャリア教育が求められる背景

(1) 現代の社会が置かれている状況

少子高齢化社会の到来、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等が進む中、学校から社会への移行をめぐる様々な課題が生じている。また、精神的・社会的な自立と人間関係形成能力の未熟、高学歴社会におけるモラトリアム傾向が指摘されている。

(2) 国の施策

平成11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」で「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と初めて提言された。以来、様々な提言や施策があり文部科学省は平成18年11月に、「キャリア教育推進の手引」を作成した。また、平成18年12月改正の教育基本法第二条二では、「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」とうたわれた。

(3) 子供の自己実現

将来、社会の中で自立的に生きていくことができる力の育成、子供の自己実現という観点からもキャリア教育は重要である。

2 学校の状況

(1) 東京都の取組

東京都教育ビジョン（第二次）の11「子供の社会的自立を支援する取組の推進」の重点施策として(23)「キャリア教育の推進」で「小・中学校におけるキャリア教育の普及・啓発」が挙げられている。それを受け、平成20年10月4日には「東京都キャリア教育推進フォーラム」[みんなで子供の未来を開こう！～家庭・学校・地域・社会が連携したキャリア教育の推進～]を開催し、実践紹介・パネルディスカッションを行った。

(2) 学校の一般的な状況

キャリア教育の必要性は感じているものの、どのように進めていったらいいかわからなかったり、先進校の取組を模倣したがうまくいかなかったりする例もある。それは、キャリア教育を施策としてやらなければならないものにとらえ、自校の問題としてとらえ

れていないからだと考えた。

3 キャリア教育をどうとらえ、実践していくか

キャリア教育は、子供が将来自立的に生きていけるようにする取組である。子供が自立するためには、他者とかかわりの中でしかその能力は育まれないと考える。他者とかかわる際に鍵となるのが自己有用感である。本研究においては、自己有用感を、「所属する集団の中で、自分は認められている、自分は必要な人間であると感じることで、自分の存在感を認識すること。」とする。周囲・社会の中での自己有用感の育成が小学校段階では重要であると考え、また改善の余地がある。そこで、キャリア教育や学校教育が、どのように子供の自立にかかわっているかを検証し、よりよいキャリア教育の推進の展望を考えた。

II 研究の方法

1 文献研究

中央教育審議会答申や先行研究を検討し、本研究におけるキャリア教育の基本的な考え方をまとめた。

2 実地調査、文献や実践事例の分析

教育現場でのキャリア教育の指導の実態を明らかにするために、①キャリア教育の先進校の取組、②キャリア教育に取り組んでいないが、児童中心の教育で独自の教育活動を行い、子供の自己有用感を高めている学校の取組を、文献による研究と実地調査による実践事例の分析を行った。

3 学校経営の立場からの検討

1～2から析出されたことを、学校経営の立場から検討を加えた。

III 研究の結果

1 キャリア教育とは

経験の積み重ね、生きざまそのものがキャリアである。キャリア教育とは、未来のある子供たちが、将来生き生きと自立的に生きていけるように支えることである。キャリア教育は、特別なプログラムや活動をすることではなく、子供たちの発達を促すという教育の原点に戻り、学校現場で「子供たちの自己有用感を育てるにはどうしたらいいのか」を考えることが重要である。

2 実地調査、実践事例

(1) 都内公立A小学校（以下：A小学校）

- ① 【参画型コミュニティースクール】平成12年度より、家庭・地域・学校が連携協働して子供たちの夢を育む「夢育の学び舎=参画型コミュニティースクール」の実践を進めている。平成15年度には、教育支援ボランティアが「NPO法人・夢育支援ネットワーク」の自立組織を立ち上げ、教育支援をしている。
- ② 【A小学校のキャリア教育のとらえ方】総合的な学習の時間・生活科の授業を「夢育」と呼び、「知るキャリア、やるアントレ」のキャッチフレーズのもと、キャリア教育とアントレプレナーシップ教育（以下：アントレ教育）を行っている。キャリア教育で仕事のことを知り、アントレ教育で社会に問いかける活動をしている。つまり、キャリア教育の中で、社会とのつながりを身近に感じ、自ら考え実行する力を育てるのがアントレ教育である。アントレ教育では、教師は支援者として進めるが指導はしない。また、教育ボランティアの協力が欠かせない。
- ③ アントレ教育の実際・6年生「A小カンパニー」
 - ア 【授業の目的】地域に自生していた紫草（薬になったり染色ができたりする）が絶滅に瀕しており、それを復活させるため、その紫草を使った商品を開発し販売することによって、紫草のことを知ってもらおう。
 - イ 【活動の仕方】10人位の会社を作り、児童が社長・企画部・広報部・経理部などの役割をもち活動する。社内会議、試作品作り、市場調査、会社の経営者や保護者などとディスカッション、商品製作、販売、決算の流れで行う。
 - ウ 【授業の実際】教師は、子供の失敗経験を大事にしている。その失敗経験をすることにより、子供たちは自ら調べたり聞いたりして学ぶことができる。アドバイスは、商店のオーナー・銀行員・主婦などのボランティアが本気で行う。作った商品は、実際に出店し現金で販売する。
- ④ 【アントレ教育の成果】子供が自ら考え、試し、失敗を重ねながら本物のアドバイスを受けることにより、本物の学び、生きた学びができる。子供たちは、ボランティアや販売の際の客との交流を通し、そこからの評価をダイレクトに感じることができ、自己有用感が高まる。卒業文集で「自分が将来こういうことをやりたい」ということを

具体的に書く子供が増えてきた。つまり、自ら考える子供、自立的に生きようとする子供が育ってきたということである。

(2) 国立大学附属B小学校（以下：B小学校）

- ① 【B小学校の教育】大正時代より、子供たちに「自律的学習法」として、独自学習→相互学習→独自学習という流れで学習を進めさせている。
- ② 【「しごと」学習（総合的な学習の時間）の実際】学習内容に対する自分の課題を決め、インタビューや調査活動をし、独自学習で発表の準備をする。相互学習では、一人の発表者の投げかける「気になること」（話題）について対話・類推する「子供による授業」がなされる。各自が独自学習した内容と関連付けて、発表者に「おたずね」をすることで、子供同士がつながり、授業の中で他人事を自分事とできるようにしている。授業の最後に、自分の考えや「気になること」を学習作文に書く。
- ③ 【B小学校の子供】6年生の相互学習の授業を参観したが、発表者に対する「おたずね」では大人の研究会をしのぐ真剣さを感じた。B小学校の子供は、目の前にある課題に対して自分のもっている知識や経験を総動員して自力解決していく。自ら考える子供が育っている。全ての学習が自分の問いから出発し、お互いに考えを交流させ、自分の考えを深めており、自己有用感を高めている。

IV 考察

キャリア教育は、社会のために必要な人材を確保するためのものではない。あくまでも、一人一人の生涯に続く学習のための今をとらえて、ものの見方、感じ方、考え方を深化拡充していくことがキャリア教育である。A小学校では、アントレ教育をすることにより、教師から与えられた課題をやらされるのではなく、子供が自ら追究したい課題となり、自立的に活動し自己有用感を高めていた。また、B小学校では、子供が自立的な学習をすることにより、自己有用感を高めていた。学校経営の立場では、対症療法的な考えではなく、「何のためのキャリア教育なのか」を考える場を設定し、教師一人一人が自分事としてとらえられるようにする必要がある。何か特別なことをするのではなく、これまでの教育活動をキャリア教育の視点でとらえ直していけばいい。子供が学習課題を自分の生活と結びつけて問いをもち他者と交流できるように支援をすれば、全てキャリア教育となる。そうした授業を皆で考えることが重要である。キャリア教育は、子供たちの生涯学習の重要な基盤となる。